HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | キルギス語の/rl/ 連続における /l/ の交替の再解釈 |
| Author(s) | 菅沼, 健太郎; アクマタリエワ, ジャクシルク |
| Citation | 北方言語研究, 12, 21-37 |
| Issue Date | 2022-03-20 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/101893 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/84911 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 04_Suganuma_Akatalieva.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 12: 21-37（日本北方言語学会 2022）

# キルギス語の /rl/ 連続における /l/ の交替の再解釈

菅 沼　健 太 郎（金沢大学）
アクマタリエワ　ジャクシルク（日本学術振興会特別研究員／新潟大学）

**キーワード：キルギス語、音韻論、子音交替、接尾辞**

## 1. はじめに — /l/ の交替—

本論文はキルギス語の /rl/ 連続における /l/ の交替に着目する。そしてその交替が以下の 2 つの特徴をもつことを示す。

(1) a. /rl/ 連続における /l/ の交替は義務的ではなく随意的なものであり、かつ派生接尾辞初頭の /l/ にのみみられる。
b. /rl/ 連続における /l/ の交替は随意的であるものの、派生接尾辞 /-lIk/ をみる限り、「動詞語幹-Ar」が接続先である場合、交替は起こらない傾向にある。

キルギス語はトルコ語などが属するチュルク諸語の一つであり、中央アジアに位置するキルギス共和国で主に話されている。キルギス語は 8 母音体系 (/e, a, ø, o, i, ɯ, ü, u/) であり、借用語を考慮しなければ子音として /p, b, t, d, s, z, k, g, tʃ, dʒ, ʃ, m, n, ŋ, l, r, j/ をもつ。また、キルギス語では母音調和と呼ばれる母音の順行同化現象がみられる。便宜上、本論文では母音調和により [i, ɯ, y, u] のいずれかで実現する母音を /I/、[y, u] のいずれかで実現する母音を /U/、[e, a, ø, o] のいずれかで実現する母音を /A/ と表記する。キルギス語では語幹に種々の接尾辞が接続することで語が派生し屈折する。そして、そのような接尾辞が接続する際に、接尾辞初頭の子音が交替することがある。例えば同言語には /l/ で始まる接尾辞があり、その初頭の /l/ は直前の分節音に応じて /d/ または /t/ に交替する。例として以下の (2) に複数接尾辞 /-lAr/ の交替を示す。

このような /l/ の交替があることは既に多くの先行研究で指摘されている。しかし、(2g) のふるえ音 /r/ に後続する際の /l/ の交替、すなわち /rl/ という音連続における /l/ の交替に関しては以下の (3) に示すように先行研究間で細かい記述の相違がみられる。

(2) 複数接尾辞 /-lAr/ の /l/ の交替

| 直前の分節音 | 例 | /l/ の実現 |
|---|---|---|
| a. 無声阻害音 | konok-**t**or“客（複数）” | /t/ |
| b. 有声阻害音 | køz-**d**ør“目（複数）” | /d/ |
| c. 鼻音 | mugalim-**d**er“先生（複数）” | /d/ |
| d. 側面音 /l/ | rol-**d**or“役（複数）” | /d/ |
| e. 接近音 /j/ | üj-**l**ør“家（複数）” | /l/ （交替せず）[1] |
| f. 母音 | too-**l**or“山（複数）” | /l/ （交替せず） |
| g. ふるえ音 /r/ | 先行研究間で記述の相違あり。 | |

(3) /rl/ 連続における /l/ の交替に関する先行研究の記述[2]

| 先行研究 | 記述 |
|---|---|
| a. Hebert and Poppe (1964: 18), Kasymova et. al. (1991: 101) | ・/-lAr/ にのみ言及。/l/ は有声子音に後続した場合 /d/ に交替する。<br>（特記などないことから、この「有声子音」には /r/ も含まれていると読み取れる。ただし、/rl/ における交替の具体例はない） |
| b. Landmann (2011: 5) | ・/-lAr/ にのみ言及。/rl/ の /l/ は交替しない。 |
| c. Kara (2008: 15) | ・/-lAr/ の /l/ は交替しないが、それ以外の接尾辞の /l/ は交替する。 |
| d. Zhu (2018: 469-470) | ・/-lAr/ では交替しない。<br>・/-lIk/ では交替する。<br>・/-lA/ では交替した形式としていない形式の両方が確認される。 |
| e. Kirchner (1998: 346) | ・接尾辞初頭の /l/ 全般に関して、直前が有声子音の場合 /l/ は /d/ に交替する。しかし、/rl/ では交替しない形式も時々好まれる (sometimes preferred.)。 |

[1] (2e) では /jl/ に関して /l/ は交替しないとした。しかし、Hebert and Poppe (1964: 18) と Kasymova et. al. (1991: 101) では具体例はないものの、/jl/ で /l/ は交替すると読み取れる記述をしている。また、Kirchner (1998: 346) は /rl/ と同様の、「交替しない形式も時々好まれる」という記述を /jl/ に対してしている。その一方で Kara (2008: 15), Landmann (2011: 5), Zhu (2018: 469) は /jl/ では /l/ は交替しないとしている。このように /jl/ でも記述が分かれているが、本研究で調査した限りではいかなる場合でも /jl/ では /l/ は交替しなかったため、(2e) では交替しないとした。本論文の主対象はあくまで /rl/ であるため /jl/ についてはこれ以上立ち入らないことにする。

[2] このように記述が異なる要因として、各先行研究が別々の方言を扱ったため、というのが考えられる。しかし、Zhu (2018) 以外は文法概説書の性格が強く正書法への言及もある。このことからそのどれもが地域方言ではなく一般的、かつ標準的なキルギス語を扱う方針のもと執筆されたと考えられる。また Zhu (2018: 468) は自身のデータは Hebert and Poppe (1964) に基づくと述べていることから、両者のデータは同じものということになる。これらのことから方言の差異により記述に相違が生じたとは考えにくい。さらに、庄垣内 (1988: 1421) にはキルギス国内の方言には音韻面にそう大きな違いはみられないという記述もある。

また、これらの先行研究の多くは具体例の提示に乏しい。さらにこれらは複数接尾辞 /-lAr/ を主に扱っているが、以下の (4) に示す /-lAr/ 以外の /l/ で始まる接尾辞は詳しく扱っていない。このように /rl/ における /l/ の交替の記述が一貫していない点、具体例に乏しくかつ /l/ で始まる接尾辞を広く扱っていない点で先行研究には問題がある。

(4) /-lAr/ 以外の /l/ で始まる接尾辞（4 種類）、なお、本研究の調査の限りでは (2a-f) の環境におけるこれらの /l/ の振る舞いは /-lAr/ と同じである。

a. /-lAʃ/ 同族名詞派生接尾辞：名詞に接続し、“同じ～の者”という意味の名詞の派生を担う。
例 sanaa“考え” →派生：sanaa-laʃ“同じ考えの者（共感者）”
ajɯl“村” →派生：ajɯl-daʃ“同じ村の者”

b. /-lIk/ 名詞形容詞派生接尾辞：名詞、形容詞に接続し、抽象名詞、形容詞の派生を担う。
例 ene“母” →派生：ene-lik“母であること（母性）”
akim“行政者” →派生：akim-dik“行政の、行政局”

c. /-lUU/ 形容詞派生接尾辞：名詞に接続し形容詞の派生を担う。
例 baa“価値” →派生：baa-luu“価値のある（高価な）”
dʒɯldɯz“星” →派生：dʒɯldɯz-duu“星のある”

d. /-lA/ 動詞派生接尾辞：名詞に接続し動詞語幹の派生を担う。
例 dʒaza“罰” →派生：dʒaza-la“罰する”
ak“白” →派生：ak-ta“白くする”

本研究では /rl/ における /l/ の交替の実態を明らかにするために、(4) の 4 つの接尾辞と /-lAr/、すなわち計 5 つの接尾辞を対象とした調査を行った。以下、その調査内容と結果について述べ、/rl/ における /l/ の交替が (1) に示した 2 つの特徴をもつことを示す。

なお、調査内容に移る前に /-lAr/ とこれらの接尾辞の接続順について述べておく。/-lAr/ は基本的に (4) の接尾辞に後接する接続順をとる。(4a-c) については /sanaa-lAʃ-lAr/“共感者たち”、/oʃ-lIk-lAr/“オシュ（地名）出身の者たち”、/aktʃa-lUU-lAr/“お金をもつ者たち”のように直接接続可能である。(4d) については /dʒaza-lA-gAn-lAr/“罰した者たち”のように分詞接尾辞 /-gAn/ を介して接続しうる。この順序が逆になっている例として後述するコンサルタント A 氏からは /dʒɯldɯz-lAr-lUU/ [dʒɯldɯz-dar-duu]“複数の星のある”という語例が示されたが、他の話者ではこれを認める者はなく、また A 氏もこれ以外の /-lAr-lUU/ を含む語例は認めないとのことだった。

## 2. 調査 1 —接尾辞の種類と交替の有無に関して—

### 2.1. 調査内容、および結果

本研究では調査を 2 つ行った。1 つ目は接尾辞の種類に着目した調査、2 つ目は接尾辞の接続先の種類に着目した調査である。本節ではそのうち前者について述べる。

まず､本研究の調査に協力してくださった言語コンサルタントは以下の 4 名の方である。

(5) 第二著者：女性、1978 年生まれ、ナルン市出身
A 氏：男性、1986 年生まれ、ナルン市出身
B 氏：男性、1981 年生まれ、ナルン市出身
C 氏：女性、1949 年生まれ、ビシュケク市出身

調査は 2021 年 1 月から 6 月にかけて､全て Zoom 等のオンラインツールを用いて行った。第二著者への調査は第一著者が、A, B, C 氏への調査は第二著者が行った。なお、今回の母語話者は全員キルギス北部出身である。庄垣内 (1988: 1417) と Kirchner (1998: 344) はキルギス標準語は北部方言を基礎としているという。これを考慮すると、今回得られたデータは北部方言のデータではあるものの、標準的かつ一般的なキルギス語のデータに近いものであるということができる。

調査票の作成に当たってはキルギス語英語辞書である Krippes (1998) を用いた。Krippes (1998) では語幹に (4) の接尾辞 a. /-lAʃ/, b. /-lIk/, c. /-lUU/, d. /-lA/ のいずれかが接続したものが見出し語としていくつか掲載されている。そして /r/ で終わる語幹では異なり語数で 70 の語幹に上記 4 つの接尾辞のいずれかが接続した形が見出し語として掲載されていた。以下の (6) にその見出し語の一部を示す。(6) からわかるように、表記上 /-lIk, -lUU, -lA/ では交替した形式と交替していない形式の両方が混在していた。/-lAʃ/ に関しては交替した形式のみが記載されていたが、別のキルギス語辞書 (Judaxin 1965) では boor-doʃ の交替していない形式である boor-loʃ が併記されていた。このように辞書において両方の形式が現れていることを踏まえると、これらの接尾辞では実際の母語話者のデータにおいても両方の形式が得られることが予測される。

(6) Krippes (1998) 内の見出し語表記の内訳と例

| | | 例（最大 3 例ずつ示す） |
|---|---|---|
| a. /-lAʃ/ | /d/ 2 例 | boor-doʃ“血のつながった親戚”，ʤer-deʃ“同郷の者” |
| | /l/ 0 例 | ただし Judaxin (1965) では boor-doʃ, boor-loʃ が併記。 |
| b. /-lIk/ | /d/ 23 例 | asker-dik“軍役”，bir-dik“団結”，planetar-duık“惑星の” |
| | /l/ 5 例 | kanaattanar-lıık“満足いく”，talapker-lik“立候補”，<br>ømür-lük“永遠の” |
| c. /-lUU/ | /d/ 16 例 | kar-duu“雪のある”，sabɯr-duu“我慢強い”，<br>ʤamgɯr-duu“雨のある” |
| | /l/ 6 例 | kastar-luu“倹約的”，kumar-luu“無謀な”，<br>ajgɯr-luu“牡馬をもつ” |

| | | |
|---|---|---|
| | 両方記載あり<br>3 例 | kajɯr-d/luu“徳のある”，zar-d/luu“悲しい”，<br>ønør-d/lüü“才能のある” |
| d. /-lA/[3] | /d/ 12 例 | kir-de-t“汚す”，tor-do“繕う”，dajar-da“準備する” |
| | /l/ 11 例 | kabar-la“知らせる”，ʤabɯr-la-n“苦しむ”，<br>natʃar-la-n“弱くなる” |

母語話者への調査でも /d/ と /l/ 両方の形式が現れるという予測とともに、調査 1 では Krippes (1998) から得た /r/ で終わる 70 の語幹を 4 名の母語話者に提示し、先の 5 つの接尾辞 (/-lAʃ/, /-lIk/, /-lUU/, /-lA/, /-lAr/) が接続可能かどうか、接続するとしたら接尾辞がどのように実現するかを尋ねた（ただし /-lAʃ/ については一部未調査となった)。以下の (7) に各母語話者の調査結果を示す。

(7) i. 第二著者

| 接尾辞と回答総数 / /l/ の実現 | /-lAʃ/<br>2 | /-lIk/<br>38 | /-lUU/<br>38 | /-lA/<br>36 | /-lAr/<br>36 |
|---|---|---|---|---|---|
| /d/( ) 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数 | 2 (2) | 31 (2) | 28 | 23 | 0☆ |
| /l/ と /d/ を同程度に用いる。 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0☆ |
| /l/ ( ) 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数 | 0 | 7 (2) | 10 (4) | 12 (2) | 36☆ |

ii. A 氏

| 接尾辞と回答総数 / /l/ の実現 | /-lAʃ/<br>未調査 | /-lIk/<br>33 | /-lUU/<br>49 | /-lA/<br>50 | /-lAr/<br>63 |
|---|---|---|---|---|---|
| /d/( ) 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数 | | 20 (2) | 36 (4) | 38 (5) | 0☆ |
| /l/ と /d/ を同程度に用いる。 | | 1 | 0 | 0 | 0☆ |
| /l/ ( ) 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数 | | 12 (5) | 13 (4) | 12 (3) | 63☆ |

iii. B 氏

| 接尾辞と回答総数 / /l/ の実現 | /-lAʃ/<br>2 | /-lIk/<br>41 | /-lUU/<br>48 | /-lA/<br>30 | /-lAr/<br>67 |
|---|---|---|---|---|---|
| /d/( ) 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数 | 2 (2) | 12 (2) | 9 (4) | 16 (2) | 0☆ |
| /l/ と /d/ を同程度に用いる。 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0☆ |
| /l/ ( ) 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数 | 0 | 29 (19) | 39 (31) | 14 (7) | 67☆ |

iv. C 氏

| 接尾辞と回答総数 / /l/ の実現 | /-lAʃ/<br>未調査 | /-lIk/<br>32 | /-lUU/<br>49 | /-lA/<br>52 | /-lAr/<br>63 |
|---|---|---|---|---|---|
| /d/( ) 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数 | | 17 (2) | 38 (8) | 34 (7) | 0☆ |
| /l/ と /d/ を同程度に用いる。 | | 1 | 1 | 6 | 0☆ |
| /l/ ( ) 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数 | | 14 (5) | 10 (5) | 12 (6) | 63☆ |

辞書の記載からの予測通り、/-lIk/, /-lUU/, /-lA/ については /d/ と /l/ 両方の回答が得られた。第二著者の /-lA/ に対する回答を例に挙げると、第二著者は 70 の語幹のうち、36 の語

[3] (6d) /-lA/ は使役形接尾辞 /-t/、再帰形接尾辞 /-n/ などの態接尾辞が /-lA/ に接続したものも含む。

幹に /-lA/ が接続できると回答した。そしてその 36 例のうち、23 例では /l/ が /d/ に交替し、1 例に関しては両方の形式を同程度に用いると回答した。そして残りの 12 例では、/l/ は /l/ のままだがそのうち 2 例は /d/ に交替した形式を聞いたことがあると回答した。また、/-lAʃ/ では回答数は少ないものの全てに関して /d/ に交替するが /l/ のままの形式も聞くとのコメントがあった。このように /-lAʃ/, /-lIk/, /-lUU/, /-lA/ については /d/ と /l/ の両方が音声形に現われうる。しかし、複数接尾辞 /-lAr/ については表中の☆付きの数字が示すように、全話者が交替していない /l/ のままで実現すると回答した。この結果は以下のようにまとめることができる。

(8) a. (4) の接尾辞 (/-lAʃ/, /-lIk/, /-lUU/, /-lA/) に関して：「同程度に用いる」という回答や括弧内数字の「他方も聞く」というコメントも含め、 /d/ と /l/ 両方の回答があった。

b. /-lAr/ に関して：全ての母語話者が全ての語幹で /l/ と回答した。

以下これらについて考察を進める。まず (8a) に示すように /-lAʃ/, /-lIk/, /-lUU/, /-lA/ では /d/ と /l/ 両方の回答があった。すなわち /l/ が /d/ に交替しうるわけであるが、その交替の有無には以下の (9) の灰色のセルに示すように話者間で差異がみられる部分があった。また、(10) に示すように、同一話者に同じ語幹について尋ねても、接続する接尾辞によって交替の生起が異なっており、どのような場合に交替が起きるのかについて一般化できる傾向が見出せなかった。

(9) 回答結果（一部）

/-lIk/, /-lUU/, /-lA/ それぞれに関して、4 名全員から回答が得られた語幹の結果を 8 例ずつ示す。なお、話者間で回答が一致していない場合はセルを灰色にした。$_{(l),(d)}$ というのはそれぞれ交替していない形式、交替した形式を聞いたことがあるというコメントがあったことを、l~d は同程度に使用するという回答があったことを示す。

a. /-lIk/

| 語幹＼話者 | 第二著者 | A 氏 | B 氏 | C 氏 |
|---|---|---|---|---|
| bir“一” | d | l$_{(d)}$ | d$_{(l)}$ | l$_{(d)}$ |
| borbor“中心” | d | d | d | d |
| dolboor“事案” | d | l | d | l |
| kamkor“配慮” | d | d | d | d |
| ømür “寿命” | l$_{(d)}$ | d$_{(l)}$ | l | d$_{(l)}$ |
| tar“狭い” | d | d | l$_{(d)}$ | d |
| zøøkür“悪党” | d$_{(l)}$ | l$_{(d)}$ | l$_{(d)}$ | l$_{(d)}$ |
| ʤer“土地” | d$_{(l)}$ | l | l$_{(d)}$ | l |

b. /-lUU/

| 語幹＼話者 | 第二著者 | A 氏 | B 氏 | C 氏 |
|---|---|---|---|---|
| ajgɯr“牡馬” | d | l | $d_{(l)}$ | l |
| bür“つぼみ” | d | d | d | d |
| ønør “器用さ” | l | l | $l_{(d)}$ | $d_{(l)}$ |
| sɯjkɯr“魔法” | d | d | $l_{(d)}$ | d |
| ʃor“塩沼” | l | d | $l_{(d)}$ | d |
| ʤamgɯr“雨” | d | $d_{(l)}$ | $l_{(d)}$ | $d_{(l)}$ |
| ʤer“土地” | d | d | l | d |
| zar“悲しみ” | d | d | d | d |

c. /-lA/

| 語幹＼話者 | 第二著者 | A 氏 | B 氏 | C 氏 |
|---|---|---|---|---|
| barabar“同じ” | l | l | l | l |
| dolboor“事案” | d | l | l | l |
| ɯzgaar“寒さ” | d | d | d | d |
| kabar“知らせ” | $l_{(d)}$ | d | $l_{(d)}$ | d |
| kadɯr“尊敬” | l | l | l | l~d |
| natʃar“弱い” | l | d | $l_{(d)}$ | $l_{(d)}$ |
| sɯjkɯr“魔法” | $l_{(d)}$ | $l_{(d)}$ | $l_{(d)}$ | $l_{(d)}$ |
| zar“苦しみ” | l~d | l | l | l |

(10) 話者内の差異：同一話者に同じ語幹について尋ねても、接尾辞初頭の /l/ が交替するかどうかは接尾辞によって異なる。話者ごとに 2 例ずつ示す。

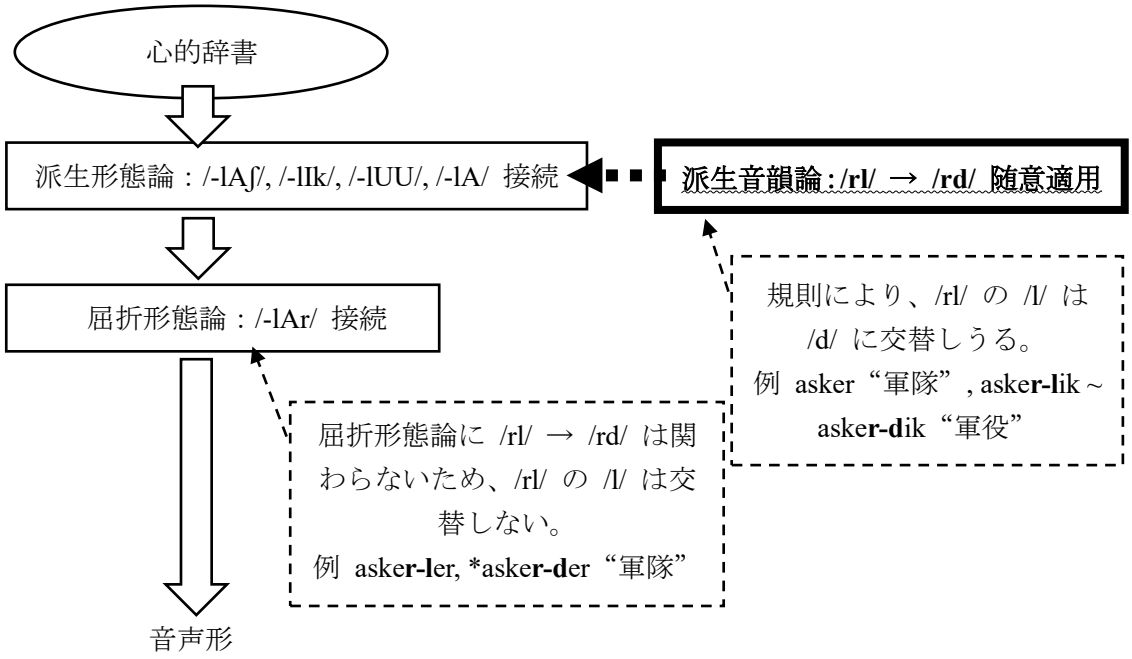
例　第二発表者　dolboor“事案”　dolboor-**l**uu dolboor-**d**a
　　zar“苦しみ”　zar-**l**ɯk, zar-**d**uu
　A 氏　barabar“同じ”　barabar-**d**ɯk, barabar-**l**a
　　ømür“寿命”　ømür-**d**ük, ømür-**l**üü
　B 氏　ɯzgaar“寒さ”　ɯzgaar-**l**uu, ɯzgaar-**d**a
　　kamkor“配慮”　kamkor-**l**uu, kamkor-**d**uk
　C 氏　asker“軍隊”　asker-**l**ik, asker-**d**uu
　　sabɯr“我慢”　sabɯr-**l**ɯk, sabɯr-**d**a-n

このことから、本論文ではこれらの接尾辞初頭の /l/ は /rl/ 連続においては随意的に /d/ に交替すると解釈する。随意的であるため、交替していない形式も認められ、かつ話者間、話者内でその交替の有無に差異がみられるのだと考える。

次に (8b) に示した、/-lAr/ に対して全ての母語話者が全ての語幹で /l/ と回答した点について述べる。この回答結果を踏まえると、/-lAr/ は /r/ に後続する際、/d/ に全く交替しないという点で /-lAʃ/, /-lIk/, /-lUU/, /-lA/ とは明確な差異があるということになる。

この差異は派生接尾辞か否かという差異に還元できる。/-lAʃ/, /-lIk/, /-lUU/, /-lA/ はそれぞれ語幹に接続し、名詞、形容詞、動詞といった新たな語を形成する派生接尾辞である一方、複数接尾辞は名詞の数に応じた語形変化、すなわち名詞の屈折（曲用）に関わる屈折接尾辞である。この点を踏まえると、/rl/ を /rd/ とする随意的な音韻規則 (/rl/→/rd/) は派生接尾辞にのみ適用され、屈折接尾辞には適用されないということができる[4]。/-lAr/ が /-lAʃ/, /-lIk/, /-lUU/, /-lA/ に後接することも踏まえると、音韻規則 /rl/→/rd/ は以下の (11) に示すように、屈折形態論に先立つ派生形態論に付随して適用されるということができる。

(11) /rl/→/rd/ に着目した際に想定できるキルギス語の文法モデル[5]




ここまでの観察と考察をまとめると、/rl/ 連続における /l/ の交替は (1a) にも示した以下の特徴をもつということができる。

(12) /rl/ 連続における /l/ の交替は、義務的ではなく随意的なものであり、かつ派生接尾辞初頭の /l/ にのみみられる。（＝(1a)）

[4] この考えに従えば、他の /l/ で始まる屈折接尾辞も規則 /rl/ → /rd/ の適用を受けないことが予測される。しかし、/-lAr/ 以外の /l/ で始まる屈折接尾辞はキルギス語には存在しないためこの点は検証できない。

[5] ここでは話者が毎回規則適用を経て語彙を生成しているかのように記載したが、むしろ各話者は使用頻度の高い語彙に関しては毎回規則適用を経るのではなく、語幹から接尾辞までを一つの語彙項目として心的辞書に登録していると考えられる。その際に登録される形式が交替した形式であるか、交替していない形式であるか、あるいは両方であるかについては話者が随意規則 /rl/ → /rd/ を語彙登録時に適用させたかどうかに委ねられる。なお、このように話者間で形式が異なっているとコミュニケーションに支障が生じる恐れがあるが、それは文脈に加え随意規則 /rl/ → /rd/ の存在によって未然に防がれる。例えば、/asker-lIk/“軍役”に対して /asker-lik/ を語彙登録している話者が /asker-dik/ を他の話者から聞いた場合、すなわち話者間で登録している形式に違いがみられた場合にはこの規則をもとに逆算することでそれが心的辞書内の /asker-lik/ と同一のものであると理解すると考えられる。

### 2.2. 調査結果の背景 —聞こえ度と分節音の隣接性—

調査 1 より (12) が明らかになったわけであるが、本節では調査 2 に移る前に、なぜ /rl/ がこのような特異な交替をみせるのかについて考察する。ただし、現時点では今後の課題とすべき点も残されているため、予備的な考察にとどめる。

(2a-d) konok-tor“客 (複数)”、køz-dør“目 (複数)”、mugalim-der“先生 (複数)”、rol-dor“役 (複数)”で示したように、複数接尾辞 /-lAr/ の接尾辞初頭子音 /l/ は直前が無声阻害音である場合 /t/ に交替し、鼻音、側面音、有声阻害音の場合は /d/ に交替する。このような交替は (4) でも述べたように ajɯl-daʃ “同じ村の者”、akim-dik“行政の、行政局”ʤɯlduɯz-duu“星のある”、ak-ta“白くする”といった形で派生接尾辞でも生じる。このように /rl/ 以外における /l/ の交替は一律に起きる一方、/rl/ における /l/ の交替は派生接尾辞でのみみられ、かつ随意的であるという点で特異である。すなわち無声阻害音、有声阻害音、鼻音をそれぞれ T, D, N と略記しつつまとめると以下の (13) のようになり、(13a, b) と (13c) の間に差異が存在していることになる。

(13)

| | a. Tl→ Tt | b. {D, N, l}l →{D, N, l}d | c. rl→rd |
|---|---|---|---|
| 派生接尾辞 | ✔ | ✔ | ✔（ただし随意的） |
| 屈折接尾辞 | ✔ | ✔ | ＊（交替しない） |

このように /rl/ だけがなぜ他と異なる交替をするのかに対して、答えはまだ十分整理できていない。しかし、随意的である点には子音のもつ聞こえ度が、派生接尾辞のみという点には分節音の隣接性が、それぞれの背景にあると考えられる。

まず聞こえ度に関して述べると、Davis (1998) はキルギス語と同じチュルク諸語のひとつであり、(13a, b) と同じ音交替をもつカザフ語の分析を行っている。その中で Davis (1998) は以下に示す Syllable Contact Law という法則がカザフ語を含む諸言語の音交替の背景として存在しうることを述べる。

(14) Syllable Contact Law

A syllable contact A$B is the more preferred, the greater sonority of the offset A and the less sonority of the onset B.

[Davis 1998, p. 182, (2)]

Syllable Contact Law は端的に述べれば、分節音 A と B が音節境界（$）を境に接している際、A の聞こえ度は B よりも高く、B の聞こえ度は A よりも低くなっている方が好まれる、という法則である。Davis (1998) はカザフ語において Syllable Contact Law は以下の 2 つの制約の形となって働いているという。

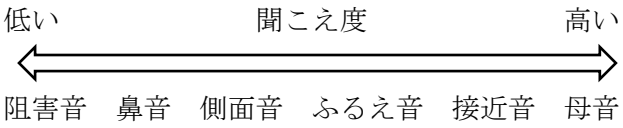
(15) a. Syllable Contact: Avoid rising sonority over a syllable boundary.
b. Syllable Contact Slope: Have falling sonority over a syllable boundary.

[Davis 1998, p. 189, (16)]

Davis (1998) はこの 2 つをまとめて Syllable Contact Constraint Family と呼ぶため、本論文ではこれを略して SCCF と呼ぶ。SCCF は A$B に関して、A から B にかけて聞こえ度が下がるような音連続を求める。ゆえに、分節音 B の方が A よりも高い聞こえ度をもつ、あるいは A と B が同じ聞こえ度をもつ音連続は避けられ、これらの制約により B の聞こえ度が下がるような音交替が促される。聞こえ度の高さを等号、不等号で表すならば、A＜B または A＝B は認められず、制約により A＞B になると表せる。

なお、Davis (1998) で仮定されているカザフ語の聞こえ度階層は (16) に示すものであり、これは Hayes (2009: 75) や斎藤 (2005: 98) など一般的な音韻論、音声学の概説書に挙げられているものと概ね合致することから言語一般的な聞こえ度階層といえる。

(16) 聞こえ度の階層




これを踏まえ、Davis (1998) は /Tl, Dl, Nl/ は A＜B、また /ll/ は A＝B となっているため SCCF により、分節音 B にあたる /l/ が阻害音 (/t, d/) に交替するのだと述べている。/Nl, ll/ が交替した /Nd, ld/ は A＞B となる。また /Tl, Dl/ が交替した /Tt, Dd/ は、結局は A＝B となるものの、分節音 B の聞こえ度を最大限下げることで少なくとも Syllable Contact 制約には従おうとしている。

このような SCCF がキルギス語にも作用していると考えると、/rl/ という音連続は「ふるえ音 側面音」、すなわち A＞B であるため、SCCF に従ってはいる。しかしながら、ふるえ音と側面音は聞こえ度階層内で隣接しており、ともに流音という点でもその聞こえ度の差はわずかである。その点で /rl/ は SCCF に従っているがやや中途半端な聞こえ度の下がり方をしているといえる。その一方でこれを /rd/ にした場合、「ふるえ音 阻害音」という音連続になり、はっきりとした聞こえ度の下がり方になる。このように /rl/ 自体は SCCF に従っており認められるものの、よりはっきりとした聞こえ度の下がりをもつ /rd/ になる余地もある、ということが /rd/ への随意的な交替につながっていると考えられる。この SCCF については、キルギス語全体の子音の聞こえ度や他の子音の音交替も含めた検討が必要なため、今後精査していきたいと考えている。

次に分節音の隣接性についてであるが、Payne (1997: 26) は、屈折は派生に比べ生産的であるという。確かに、複数接尾辞 /-lAr/ は複数性の概念さえあればあらゆる名詞に接続しうる生産性をもつ一方、派生接尾辞は既存語彙により生産性が阻害される。例えばキルギス語の動詞派生接尾辞 /-lA/ を telefon“電話”に接続し“電話する”を表そうとすることは既存語彙 telefon ʧal- の存在により阻止される。このような生産性の差異もあってか、第二著

者によると、/-lAr/ についてはその用法と交替などを初等教育機関で学ぶ一方、派生接尾辞については特に学校教育で学ぶことはなく、むしろ語幹と派生接尾辞のセットをそのまま語彙として習得している意識があるという。これを踏まえると、セットがそのまま習得される分、語幹と派生接尾辞の間の形態素境界はその存在があまり意識されていないと考えることができる。そしてその一方で、生産性の差、および教育という社会言語学的背景を踏まえると、語幹と屈折接尾辞の間の形態素境界は、語幹と派生接尾辞の間の形態素境界に比べれば意識されていると考えることができる。つまり、形態素境界が意識される分、語幹末の /r/ と屈折接尾辞初頭の /l/ の隣接性は損なわれていることになる。このように隣接性が損なわれていることが屈折接尾辞初頭の /l/ が交替しないことにつながっている可能性がある。なお、このように考えると、/T, D, N, l/ に後続する /-lAr/ もその接続先との隣接性が損なわれていることになるが、こちらでは交替が起きている。これは /Tl, Dl, Nl, ll/ という音連続が /rl/ と異なり SCCF に違反しているためだといえる。このように分節音間の隣接性が形態論的な境界によって損なわれること、およびそれにより音交替が阻まれることは次節の調査 2 の結果の背景にも関連していると考えられるため、合わせて今後の課題としたい。調査 2 の結果の背景については、3.2. 節で考察する。

## 3. 調査 2 —接続先の種類と交替の有無に関して—

### 3.1. 調査内容、および結果

前節の調査 1 では接尾辞の種類に着目して /rl/ における /l/ の交替の生起を明らかにした。本節の調査 2 では接尾辞の接続先の種類に着目して交替の生起を明らかにする。この調査 2 では /-lIk/ についてのみ調査を行った。これは派生接尾辞の内、/-lIk/ のみが複数の異なる形態構造に接続するためである。具体的には /-lIk/ は以下の (17) に示す 3 つの形態構造をその接続先とする。

(17) 接続先の種類と /-lIk/ の接続した例[6]

a. 名詞語幹

| | |
|---|---|
| bir“一” | /bir-lIk/“団結” |
| baatur“英雄” | /baatur-lIk/“英雄的な（こと）” |

b. 名詞語幹-ker（または異形態として -ger[7]）

| | |
|---|---|
| ajla-ker“ずるい人” | /ajla-ker-lIk/“ずるい人のような（こと）” |
| talap-ker“立候補者” | /talap-ker-lIk/“立候補” |

[6] (17a) の /-lIk/ の接続先である名詞語幹、および (17b) の /-ker/ の接続先である名詞語幹は全て単一形態素からなるものであり、名詞語根ともいえる。一方で (17c) の /-Ar/ の接続先である動詞語幹の中には、単一形態素であるため動詞語根と呼べるものもある。しかし、複数形態素から構成されており動詞語根とは呼べないものもある。ゆえに、(17c) に属するものはまとめて動詞語幹と呼ぶのが適切である。例えば ajt- は単一形態素であるため動詞語根とも呼べる。しかし、külkü keltir- の keltir- は厳密には動詞語根 kel-“来る”に使役形接尾辞 -tir が接続しており単一形態素ではないため動詞語根とは呼べない。

[7] この /-ker/ と同じ機能をもつ形態素は同じチュルク諸語のひとつであるトルコ語にも /-kjar/ という形で存在する。Göksel and Kerslake (2005: 63) ではトルコ語の /-kjar/ はペルシア語由来と記されているため /-ker/ もペルシア語由来と目される。この /-ker/ の異形態である /-ger/ の出現条件は明らかではない。sooda-ger“商人”と ajla-ker“ずるい人”のように、直前の分節音が同じであっても両方が現れうるためで

c. 動詞語幹-Ar

ajt-“言う”　　/ajt-Ar-lIk/ “言うべき（こと）”

külkü keltir-“笑いをもたらす”/külkü keltir-Ar-lIk/“笑いをもたらすような（こと）”

(17b) の /-ker/ は生産性はあまりないものの、“～する者”という意味の名詞を派生する派生接尾辞である。(17c) の /-Ar/ は Ali kel-er “アリは来るだろう”のように動詞語幹に接続し非確定的な未来を表す屈折接尾辞である。また「動詞語幹-Ar」という形式は kel-er ubakɯt“来たる時”のように分詞として名詞を修飾しうる。本来名詞と形容詞に接続する /-lIk/ が「動詞語幹-Ar」に接続できるのは、「動詞語幹-Ar」がこのように分詞として形容詞に準ずる性質をもつためだと考えられる[8]。

調査に当たっては、まず辞書 (Krippes 1998、Judaxin 1965、Akmatalijev et. al. 2011) から (17b, c) に該当する語をそれぞれ 18 語、48 語抽出した。そして調査 1 と同様の調査を (5) の母語話者の方々に対して行った。なお、調査 1 の /-lIk/ のデータはその多くが (17a) に該当するものであったが、(17b, c) に該当するものがそれぞれ 5 例、1 例あったため、それらを抜き出したものを (17a) のデータとした。また抜き出した 5 例と 1 例をそれぞれ (17b, c) に加えた。このような再整理をした上での回答結果を以下に示す。

(18) i. 第二著者

| 接続先の種類と回答総数 / /l/ の実現 | (17a) 32 | (17b) 20 | (17c) 48 |
|---|---|---|---|
| /d/( ) 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数 | 28 (2) | 8 (2) | 0★ |
| /l/ と /d/ を同程度に用いる。 | 0 | 0 | 0 |
| /l/ ( ) 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数 | 4 (1) | 12 (5) | 48 (2)☆ |

ii. A 氏

| 接続先の種類と回答総数 / /l/ の実現 | (17a) 27 | (17b) 22 | (17c) 47 |
|---|---|---|---|
| /d/( ) 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数 | 16 (2) | 7 (2) | 4 (2)★ |
| /l/ と /d/ を同程度に用いる。 | 1 | 5 | 0 |
| /l/ ( ) 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数 | 10 (3) | 10 (8) | 43 (13)☆ |

ある。ただし少なくとも、直前の子音が無声音である場合には必ず /-ker/ が現れ、直前が共鳴音である場合には /-ger/ または /-ker/ が現れていた。Kara (2008: 16) ではキルギス語の語頭 /k/ 音は先行語の末音が共鳴音である場合有声化することが述べられている（例 /ʤakʃɯ kɯz/ [ʤakʃɯ gɯz] “美しい娘”）。おそらく /-ger/ はこれに類する有声化が散発的に語内で適用された結果現れたものだと考えられる。

[8] /-Ar/ はあくまで時制を担う屈折接尾辞であり、形容詞を派生させる派生接尾辞ではない。仮に派生接尾辞であった場合、動詞語幹-Ar は形容詞として比較級接尾辞 /-IrAAk/ の接続を許すことが予測されるがそのようなことはできない（例 *itʃ-er-ireek “より（多く）飲む人”）。一方で純粋に形容詞派生接尾辞である /-lUU/ はこれの接続を許す（例 akɯl-duu-raak “より賢い”）。

iii. B 氏

| 接続先の種類と回答総数 / /l/ の実現 | (17a) 35 | (17b) 20 | (17c) 47 |
|---|---|---|---|
| /d/( ) 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数 | 11 (2) | 1 | 2 (2)★ |
| /l/ と /d/ を同程度に用いる。 | 0 | 2 | 1 |
| /l/ ( ) 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数 | 24 (16) | 17 (12) | 44 (33)☆ |

iv. C 氏

| 接続先の種類と回答総数 / /l/ の実現 | (17a) 26 | (17b) 21 | (17c) 47 |
|---|---|---|---|
| /d/( ) 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数 | 13 (2) | 7 | 4 (1)★ |
| /l/ と /d/ を同程度に用いる。 | 1 | 1 | 0 |
| /l/ ( ) 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数 | 12 (3) | 13 (3) | 43 (5)☆ |

(17a)「名詞語幹-lIk」に関しては各話者で回答が割れ、第二著者では /d/ という回答が、B 氏では /l/ という回答が多かった。そして A 氏と C 氏では /d/ と /l/ の回答がほぼ同数となった。(17b)「名詞語幹-ker-lIk」では全員やや /l/ という回答が多いものの B 氏以外では /d/ という回答も一定数あった。そして、(17c)「動詞語幹-Ar-lIk」ではすべての話者で /l/ という回答数が多くなった（表中★☆部分）。

全体を見渡すと、(17a, b) では特定の傾向はつかめないものの、(17c) では /d/ の回答数が少なく、/l/ の回答数が多いという傾向がみて取れる。この (17c) に対する見方は統計的にも支持される。(17a-c) それぞれに関して、各話者の回答の偏り、および 4 名の回答の総和の偏りについてカイ 2 乗検定を行ったところ、(17c) でのみ各話者、および総和の両方で /d/ と /l/ の回答の間に有意な偏りが観察された（第二発表者 : $\chi^2(2) = 96.01$, $p < .01$、A 氏 : $\chi^2(2) = 72.05$, $p < .01$、B 氏 : $\chi^2(2) = 76.90$, $p < .01$、C 氏 : $\chi^2(2) = 72.05$, $p < .01$、総和 : $\chi^2(2) = 315.55$, $p < .01$）[9]。この統計結果も考慮し、本論文では調査 2 の観察結果を以下のようにまとめる。

(19) /rl/ 連続における /l/ の交替は随意的であるものの、派生接尾辞 /-lIk/ をみる限り、「動詞語幹-Ar」が接続先である場合、交替は起こらない傾向にある。（＝(1b)）。

### 3.2. 調査結果の背景 —形態論的な境界による音交替の阻止—

(19) に述べたように、/-lIk/ の /l/ は「動詞語幹-Ar」が接続先である場合、交替しない傾向にある。本節ではこれの背景、すなわちこのような傾向がなぜみられるのかに関して 2.2. 節同様の予備的な考察を行う。(19) のようにある種の形態構造では音交替がみられないという現象は他の言語にもみられる。例えば、日本語の漢字形態素（いわゆる漢語）では (20a)

[9] 統計結果に関して、(17a) では第二著者でのみ /d/ と /l/ の回答の間に有意な偏りが観察されたものの、他の話者、および総和では有意な偏りは観察されなかった。また、(17b) では B 氏と総和では有意な偏りが観察されたものの、他の話者では有意な偏りは観察されなかった。

に示すように、漢字形態素同士の接続であれば子音同化が起きる。しかし、(20b) に示すように、漢字形態素同士の接続により完成された語に新たに別の漢字形態素が接続する場合、そのような同化は起きない (Itô and Mester 1996)。すなわち語境界という形態論的な境界が同化を阻んでいるといえる。

(20) a. 漢字形態素-漢字形態素：子音同化が起きる (/tu-s/ → /s-s/, /tu-k/ → /k-k/)。
/betu-seki/ [bes-seki]“別席”
/betu-ku/ [bek-ku]“別区”

b. {漢字形態素-漢字形態素}語-漢字形態素：子音同化が起きない。
/{toku-betu}語-seki/ [toku-betsu-seki], *[toku-bes-seki]“特別席”
/{toku-betu}語-ku/ [toku-betsu-ku], *[toku-bek-ku]“特別区”

キルギス語の「動詞語幹-Ar」もこれと並行して捉えれば、/-Ar/ の末尾には「動詞語幹-Ar}語」のように語境界が存在し、それが /r/ と /l/ の隣接性を損なうため、交替が起きづらくなったと分析できる。この分析案で問題となるのは、(17a) の名詞語幹や (17b) の「名詞語幹-ker」も「動詞語幹-Ar」同様、語としての独立性をもちその末尾に語境界があることを予測するが、「動詞語幹-Ar」とは振る舞いが異なるという点である。これに対しては、以下に示すように、/-lIk/ は (17a, b) では語より小さい語幹レベルで接続しており、「動詞語幹-Ar」では語のレベルで接続している、というように、接続するレベルが異なると考えることで説明を与えられる。

(21) a. (17a) 名詞語幹]語幹-lIk：語幹レベルでの /-lIk/ の接続。
b. (17b) 名詞語幹-ker]語幹-lIk：名詞語幹-ker 全体を語幹としたうえでの、語幹レベルでの/-lIk/ の接続。
c. (17c) 動詞語幹]語幹-Ar}語-lIk：動詞語幹-Ar は語を形成、/-lIk/ は語に接続。語境界により交替が阻まれうる。

この分析案を支えるためには、形態論的な観察を通して、(17a, b) と (17c) の形態論的レベルが異なることを示す必要がある。これについては今後検討していきたいと考えている。

## 4. まとめと今後の課題

本論文ではキルギス語の /rl/ における /l/ の交替の実態を明らかにするために行った調査とその結果について述べた。まとめると、キルギス語の /rl/ における /l/ の交替が以下の 2 つの特徴をもつことが今回の調査により明らかとなった。

(22) = (1)
a. /rl/ 連続における /l/ の交替は、義務的ではなく随意的なものであり、かつ派生接尾辞初頭の /l/ にのみみられる。

b. /rl/ 連続における /l/ の交替は随意的であるものの、派生接尾辞 /-lIk/ をみる限り、「動詞語幹-Ar」が接続先である場合、交替は起こらない傾向にある。

このように派生か否かという形態論的性質が交替に関わること、および接尾辞接続先の種類が交替の生起に関わっていることは先行研究では述べられておらず、本論文では 2 つの調査を通してキルギス語の形態音韻論に関して新たな知見を見出すことに成功したといえる。

今後の課題としては以下の 2 つが挙げられる。

(23) a. (22a) に関して：/rl/ における /l/ の交替はなぜ派生接尾辞でのみみられ、なぜ随意的なのか。

b. (22b) に関して：なぜ「動詞語幹-Ar」が接続先である場合、交替は起こらない傾向にあるのか。

2.2.節と 3.2.節ではこれらについての予備的考察を行ったが、今後さらにこれらの考察を進め、キルギス語の形態音韻論の仕組みをより詳しく明らかにしていきたいと考えている。

## 引用文献


Akmatalijev, Abdyldažan et.al. (2011) *Kyrgyz Tilinin Sözdügü*. Biškek: Avrasya Press.

Davis, Stuart (1998) Syllable contact in Optimality Theory. *Korean Journal of Linguistics* 23: 181-211.

Göksel, Aslı and Celia Kerslake (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. London: Routledge.

Hayes, Bruce (2009) *Introductory Phonology*. Malden, MA: Wiley-Blackwell.

Hebert, Raymond J. and Nicholas Poppe (1964) *Kirghiz Manual*. The Hague: Mouton.

Itô, Junko and Armin Mester (1996) Stem and word in Sino-Japanese. In: T. Otake and A. Cutler (eds.) *Phonological Structure and Language Processing: Cross-Linguistic Studies*, 13-44. Berlin: Mouton de Gruyter.

Judaxin, Konstantin K. (1965) *Kirgizsko-russkij slovar'*. Moskva: Sovetskaja Entsiklopedija.

Kara, Dávid Somfai (2008) *Kyrgyz*. München: Lincom Europa.

Kasymova, Bella, Kurmanbek Toktonaliev and Asan Karybaev (1991) *Izučaem Kirgizskij Jazyk*. Frunze: Mektep.

Kirchner, Mark (1998) Kyrgyz. In: Lars Johanson and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic Languages*, 344-356. London: Routledge.

Krippes, Karl A. (1998) *Hippocrene Concise Dictionary Kyrgyz, Kyrgyz-English English-Kyrgyz Glossary of Terms*. New York: Hippocrene Books.

Landmann, Angelika (2011) *Kirgisisch Kurzgrammatik*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Payne, Thomas E. (1997) *Describing morphosyntax A guide for field linguists*. Cambridge: Cambridge University Press.

Zhu, Hanzhi (2018) Sonorant Restrictions in Kyrgyz. In: Wm. G. Bennett et al. (eds.) *Proceedings of the 35th West Coast Conference on Formal Linguistics,* 468-478. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
齋藤純男 (2005) 『日本語音声学入門 改訂版』東京：三省堂.
庄垣内正弘 (1988)「キルギス語」亀井孝、河野六郎、千野栄一 他（編）『言語学大辞典』第 1 巻. 1416-1422. 東京：三省堂.

**謝辞**

本発表の内容は、第一、第二著者の 2020 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会（2021 年 3 月 20 日、Zoom によるオンライン開催）における発表内容、および日本言語学会第 162 回大会（2021 年 6 月 26 日、Zoom によるオンライン開催）における発表内容に大幅な加筆、修正を加え発展させたものである。発表時にコメントをくださった方々、言語コンサルタントの方々、および本論文の匿名査読者 2 名に感謝申し上げる。また本研究は、文部科学省の卓越研究員事業、科研費（課題番号 21K12980, 21J40129, 18H03578）、および AA 研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における情報構造と知識管理―音韻・形態統語・意味のインターフェイス―」の支援を受けたものである。

## A Reinterpretation of /l/-Alternation in Kyrgyz /rl/ Sequences

Kentaro SUGANUMA (Kanazawa University)
Jakshylyk AKMATALIEVA (JSPS / Niigata University)

Keywords: Kyrgyz, Phonology, Alternation, Suffix

As several previous studies (Hebert and Poppe 1964, Kasymova et al. 1991, Kirchner 1998, Kara 2008, Landmann 2011, and Zhu 2018) have described, the suffix-initial /l/ in Kyrgyz alternates to /d/ or /t/ when it follows certain consonants (e.g., the plural suffix /-lAr/, *rol-dor* “rolls,” *mugalim-der* “teachers,” *køz-dør* “eyes,” and *konok-tor* “guests”). However, scholars have not arrived at a consensus regarding the rules of /l/-alternation in /rl/ sequences. Furthermore, most have focused on the plural suffix /-lAr/ and not examined other /l/-initial suffixes, such as the nominal suffix /-lIk/.

This study, therefore, reinterprets /l/-alternation in /rl/ sequences, including the data of suffixes other than /-lAr/.

Kyrgyz has five /l/-initial suffixes: the inflectional suffix /-lAr/ and the derivational suffixes /-lAʃ/, /-lIk/, /-lUU/, and /-lA/. Four native speakers were surveyed about whether /l/ alternates when these suffixes are attached to stems ending in /r/. The results are summarized as follows:

i. The /l/ of a derivational suffix alternates optionally in /rl/ sequences but that of the inflectional suffix /-lAr/ does not.
ii. Although the /l/ of a derivational suffix alternates optionally in /rl/ sequences, alternation tends to not occur when /-lIk/ attaches to a verb-*Ar* construction.

（すがぬま・けんたろう　suganumak@staff.kanazawa-u.ac.jp）
（アクマタリエワ・ジャクシルク　ajbukarbekovna@gmail.com）